

えっちが上手になりたくて
マチアプを始めたら
イケめろお兄さんに

捕まって

「セックスできるなら
だれでもよかつたってこと？」と
容赦ない

おちんぽピストン

されちゃいました



「えっちが上手になりたくてマチアプを始めたらイケめろお兄さんに捕まって「セックスできるなら誰でもよかったってこと？」と容赦ないおちんぼピストンされちゃいました」

「改札を出たのでもう着きます！……つと。うー……今更だけど緊張してきた……」

そう呟きながらメッセージを送信して、金曜夜の人がごった返している駅の構内を歩いていく。

すぐにピコン、と音がしてスマホを見るとさっきのメッセージを送った相手から『お疲れ様。駅を出てすぐ、広場の噴水の前にいるよ』と返信が来た。

「……あ、くがさんもう着いてる！急がなきゃ……！」

慣れない駅で移動に少し時間がかかってしまった。

『急がないでいいからゆっくりおいで』と続けてメッセージがくるも、初対面で待ち合わせに遅刻するわけにはいかない。ぱたぱたと急ぎ足で人混みを縫ってなんとか目的地にたどり着く。

「あ、噴水あった……！けど……人多いな……えーと、くがさんは……」

色とりどりの照明で綺麗にライトアップされた噴水の周りにはたくさんの人で賑わっていた。時間带的にもちょうど今がピークなのだろう。

きよろきよろと周りを見渡しながら、先程のメッセージの相手を探す。

（人が多くて見つけづらい……くがさんも私の顔、アプリのプロフで知ってるけど……イメージと違うとか思われたらどうしよう……っ！たくさんメッセージのやり取りはしても……こ、こうして、アプリで人と会うの初めてだし……心臓がドキドキしてきた……）

そう、何を隠そう、今日私は人生で初めてマッチングアプリで繋がった相手と会うのだ。

相手はくがさん。という名前で登録してて、私より少し年上らしい。プロフィールに設定されてた写真には、綺麗な黒髪に整った容姿、少し口角をあげた表情で頬杖をつく男の人が写っていた。

（ぜったい他の可愛い女の子達からも言い寄られてそうなのに……ダメ元でメッセージを送ったら返してくれて……なんで平々凡々な私と会う気になつてくれたのか未だに分からないけど……!）

くがさんのページのいいね数は他の男性と比べても郡を抜いていて、圧倒的な女性人気が伺えた。

写真の雰囲気、メッセージでのスマートなやり取りから、かなり女性慣れしてそうな事が伝ってきて。

（多分私とは本当に気まぐれで会ってくれるだけ……だからこそ、この人ならきっと私のお願いを聞いてくれるかもって思ったんだけど）

今日の目的をそつと再確認をする。ふう……と緊張をほぐすために深呼吸を

して、引き続き辺りを見渡してると。

「お兄さん、かつこいこい！私達これからご飯行くんですけど一緒にどうですかあ？」

「背、高いですねー！彼女とかいます？」

きやあきやあと楽しげに盛り上がる声が入る。見るとキラキラな効果音がよく似合いそうな可愛い女の子二人組が、噴水の前に立ってる黒髪で背の高い男の人に話しかけている。状況的に逆ナンのようだ。

「わ……積極的すぎいなあ……私もあんな風に誘えたら……」

いいのに。そう思った瞬間、女の子に囲まれた男性が顔を上げた。バチリ、と綺麗な瞳と視線が交わる。私を見て瞬きを一つすると声を掛けられた。

「あ、チカちゃん？」

「!!」

「よかったー、会えて。ごめん、俺この子と約束してるから」

そうさらりと誘いを断って女の子達の前を通り過ぎると「迷わなかったー？」とひらひら手を振りながらこちらに歩いてくる。

背中越しに私への鋭い女の子達の眼差しを感じて、き、気まずい……なぜ私のようなパツとしない女がこの人と？と考えているのがありありと伝わってきた。

（ご、ごめんなさい、そんなの私も十分自覚してます……！）

サラサラの黒髪、キリッとした、でもどこか甘さを感じさせるセクシーな目元と少し上がった口角。高い位置にあるウエストにスラリと長い脚、黒のTシャツとボトムというシンプルな格好がむしろその整った顔面を際立たせてる。写真で見るとよりもオーラがすごい。

目の前に立つイケめろお兄さん……もとい、くがさんに緊張で冷や汗をかきながら勢いよくお辞儀をする。

「あ、はい！み、三嶋千歌です！お待たせしてすみません!!」

「待ってないし気にしないで。時間ぴったりじゃん。ごめん、ここ人が多くて見つけるの大変だったでしょ」

「い、いえ、なんというか、ある意味見つけやすかったというか……」

逆ナンされてたおかげですぐ分かりました。とは言えない……口ごもる私を不思議そうに首を傾げるくがさん。

「？まあ、合流できてよかったけど……それより、初対面の俺に初っ端からフルネーム教えちゃっていいの？」

「あ、えと……？そういうのって良くなかったですか？すみません、こうして人と会うのが初めてで……」

「ふっ、いや……珍しいなって思っただけ。そっか、初めてなんだ。じゃあ、俺も自己紹介……久我凧って言います。ずっとメッセージでやり取りしてた時から気になってたからさあ、会えて嬉しいよ、千歌ちゃん」

「っ!!」

「ははっ、顔赤くなった。プロフの写真も可愛いかったけど……本物はもっと

可愛いね」

「~~~~っ!!」

恥ずかしげもなく浴びせられる言葉に耐性皆無な私はボンッ!と顔に火がつく。

きつと久我さんにとってはなんて事ない挨拶みたいなものなんだろうけど……出会った瞬間からこの調子だと……心臓がいくつあっても足りなさそう。

(今日の目的を果たせるのか……不安になってきた……)

「とりあえず移動しようか。千歌ちゃん、甘い物好きだよね? デザートが美味しいところ予約したんだ」

「えっ、ありがとうございます! そ、そうですね……私そんな事言いましたっけ?」

「言っでは無いけど。仕事終わりにいつも何かしら甘いの食べてるから、好きなんだろうなあと思って」

「あ、ああ……確かにその日に食べた物の写真とかをよく送ってましたね……」

そ、その、毎日じゃないんですけど、退勤するとよく甘い物が食べたくなっちゃって……」

言い訳じみた言い方になってしまつて語尾がどんどん小さくなる。

アプリつてどんなやり取りをしたらいいのか分からなくて、とりあえずその日に食べた某コンビニの新作プリンが美味しかったです！とか、クリーム爆盛りフェアのシュークリームをゲットしました！とか送つてただけ……改めて思い返すとこんなかつこいいお兄さん何を見せてるんだ？と恥ずかしくなつてきた。

どうしよう。完全に食い意地がはつてゐる女つて認識されてそう。

「そうそう。毎日楽しく過ごしてんだろつたのが伝わつてきてさ、仕事で疲れてた時とか結構癒された。今日の店も気に入ってくれるといいんだけど」

「……！」

「それじゃ、行こうか」

はぐれないように気をつけて。と軽く腕を差し出されて、慣れないエスコ―

トに戸惑う。おずおずと遠慮がちに腕を組む私の様子に少し苦笑しながら、久我さんはゆっくり歩き始めた。

(こ、こんな扱いされた事ないよお~~~~~！)

すぐ横から香ってくる甘いムスクの香水に頭がクラクラする。

全然平常心を保てないまま、人混みの中を進んでいくのであった。



「わあゝゝ、すごい！個室だあゝ！ふふ……さすが久我さん、こんなオシヤレなバーが行きつけなんれすねえ」

初対面から二時間後。最初の緊張は何処にいったのやら。弾んだ声できょうきようと案内された部屋を見渡す。

「あははっ、個室って珍しいよね。俺の知り合いがやってるバーなんだ。仲間内とかでゆっくりしたい時とかによく来てるかな」

「はあゝゝそうなんですかあ。ネオンがキラキラしててきれいで……さっきのお店のご飯もデザートも本当に美味しかったのに、こんな素敵なところに連れてきてもらって……今日とっても楽しいです！」

最初、久我さんに連れて行ってもらったこれまたお洒落なお店の雰囲気圧倒されてたけど……食事をしながら言葉を交わす度に、徐々に緊張もほぐれてきて、いつものメッセージですのような話の掛け合いができた。

（久我さんに合わせてお酒も頼んでみたけど美味しかったなあ……横文字のお洒落なやつしかなくて度数とか強さとかよく分からなかったけど）

「それは良かったけど……千歌ちゃん、大丈夫？ 一件目で結構飲んでたし、酔いまわった？」

「んん？ そんな事ないですよ」

頭の中がふわふわして気分がいいだけで、気持ち悪さとかはない。まあ、そもそもお酒を普段飲まないので判断が難しいけど……きつとそこまで酔ってはいない……はず。

「いや、酔ってない人間はそんな体ゆらゆらしたりしないから」

「えっ、私いま揺れてます？ 普通に座ってるつもりなんですけど……ふ、ふふふ」

「あー、こりやだめだな……ごめん、途中で止めておけばよかった。美味そうに飲むもんだからってつきり酒強いのかと……ほら、水頼んどいたから」

「ん、んう……」

ソファに座って上機嫌になると心配そうに私を覗き込む久我さんが口元にグラスを近づけてくれた。

素面の状態だったら、自分で飲めますから……！と断固拒否してただろうけど深く考えずに、素直にこくこくと冷たい水を飲み干す。

「ん……………んっ」

「急がなくていいからゆっくり飲みな……………って、零れてる零れてる！あーあ……………せっかくの可愛い服濡れちゃったじゃん」

「あ……………あれ……………？」

久我さんの焦った声で、口の端からボタボタ水滴が滴り落ちてる事に気がついた。顎を伝ってそのままブラウスを濡らしていき、濃いシミを作っていく。薄手の生地がびったり肌に張りついて冷たい。

「思った以上に酔ってんねえ……………水だから服は乾けば大丈夫だと思うけど」
「ごめんなさい。自分で拭きま……………んむ」

「いいって。今手元おぼつかないでしょ」

そう言っただけでぼんぼんと口元に優しくおしぼりを当ててくれる久我さん。思いがけない面倒見の良さに思わず目をぱちぱちさせる。

呆れられてもおかしくない状況なのに、何故かその表情は柔らかくて……ギャップに胸がドキドキして、ついされるがままになってしまふ。

「これでよし。水、もう一杯頼む？」

「いえ、もう平気です……ありがとうございます」

「ん、もう少しここで休んだらタクシー呼ぶか。今日のところはぼちぼち解散しよ」

「っ!!」

解散。その言葉にぼやついてた頭がハツとする。久我さんが次また私と会ってくれるかなんて分からない。

今日の目的を思い出して、慌てて久我さんのシャツの裾引っ張って動きを制した。

「ん、どうした？」

「だ、大丈夫れす！いま！もう酔いさめましたから！だからもう少しだけ…」

「はいダウト。そんな舌っ足らずな人間の言葉は信用できませーん」

「う、で、でも……その……」

「んー？やけに粘るじゃん。もしかして持ち帰られんの期待してる？」

「っ!!」

口ごもる私にニヤニヤしながら冗談ぼく言う久我さん。なんてね。と続ける言葉を遮って思わず即答をした。

「そ、そうです！」

「……へっ？」

食い気味に返事をしてしまって、ピタリ。久我さんが私の言葉に文字通り固まった。目を見開いて聞き間違いか？とでも言うように私の方を凝視してくる。

（あ……ああ……っ！や、やっちゃった……もつと慎重に切り出そうと思ってたのに……！）

「千歌ちゃん？」

「あ、ごめんなさい……え、えと……わ、私、アプリを始めた理由が……その」

完全に失敗だ……。もうこうなってしまったら仕方がない。どう思われるかわからないけど……正直に理由を打ち明けないければ。

緊張で口から心臓どころかさっきまで食べたり飲んだりしたものまで飛び出しそうだけど……。

「アプリやってる理由？」

「そ、そうです。私、え、えっちが上手になりたくて……！」

「………は？どういう意味？」

久我さんが怪訝そうな声を出した。不審に思われても仕方がない。初対面の女に急にそんな事言われたら警戒するのも当たり前前だと思う。

少し低くなった声のトーンにビクリと体を震わせながら、おずおずと続ける。

「じ、実は最近、付き合ってた彼氏からお前とのセックスがつまらないってフラれたんです。……反応が鈍いし、感度が悪いからって……言われた時はショックでしたけど、私、男性経験が少なくて……実際彼との行為中にい、いった事もないですし……今思えば、確かにつまらなかっただろうなって」

「……………」

「その人にはもう未練とかはないんです。ただ、また別の人と付き合うことができて、このままだと同じことを繰り返しちゃうのかなって思っています……だから、その」

「だから、アプリで男引っ掛けてセックスの練習させてもらおうって？」
「う……そ、そうです」

五分前までのふわふわした気持ちよさは、もうどこかに飛んでいった。頬杖をつきながら鋭い目で私を見てくる久我さんに体が縮こまる。

「もっと、ムードとか作ってお誘いをしようと思ったんですけど……上手くで

きなくて……こ、こんなこと言われても気持ち悪いですよ。自分を悪くさせてしまつて本当にすみません！あの、きよ、今日はもう帰りますので……っ！」

「……………」

「あ、あの、久我さん……？ひゃっ」

ドサッ

何も言わなくなつてしまつた久我さんに不安になつていたら、不意に腕を引つ張られてテーブルの上に押し倒された。

唇がくっついてしまいそうなくらいの顔の近さに息が詰まる。突然のことに目を丸くさせて、抵抗するも両腕をがっしり押さえつけられてビクともしない。

「えっ、あの……どうして……っ」

「それってさあ……千歌ちゃんは最初から、セックス出来んなら誰でもよかったってこと？」

「え、えと……」

「答えて、知り合つたばかりの男に体全部晒して、このまんこぐちゃぐちゃにされんの期待してたって事だよね？」

「ひうっ♡」

久我さんの膝がスカートを割り入ってきて、下着の上からおまんこをぐりっ♡と刺激してきた。

予測できない動きに思わず甘い悲鳴が漏れてしまう。

「ち、ちが……」

「何が？ここで突き放したら他の男にメッセージ送ってまた誘うつもりだろ」
「……っ」

「図星かよ……まあ、いいや。なら……他の男とセックスされるくらいなら今ここで俺が教えてあげる。望み通り千歌ちゃんの体が気持ちいい事忘れられなくなるくらい……弱い場所徹底的に探して……舐めて、擦って、突いて、おかしくなるような本気セックスしようっか」

「ひっ……」

低い声でねっとり耳元に囁かれて腰がずくん♡と響く。

さっきまでとは違う、久我さんの雰囲気の変化に戸惑いが隠せない。

「え、えと………あっ♡だ、だめ……っ、ひ、ひう…っ！♡脚で、そ、そこぐりぐりしちゃ……っ」

「そこ、じゃなくて、まんこだろ。誤魔化さないでちゃんと言いな」

ぐっ♡ぐっ♡ぐりっ♡

久我さんの口調が荒っぽいものになった。膝がおまんこを連続でぐりぐりしてくる。元々望んでいたはずの事なのに、なんでだろう、頭の中では警告音が鳴り響いていて。

口にしたことがない、直接的な言い回しを強要されて恥ずかしさに口ごもってしまふ。

「そ、そんな……っ♡ふ、うっ♡あっ♡」
「ほら、言えって」

ぐりっ♡

「んあっ♡~~~~っ、お…おまんこ……っ、脚でぐりぐりって、しちゃ……だめ……だめです……っ♡」

「ははっ♡言い慣れてなくてかーわいい。そうそう、千歌ちゃんみたいに、えろいこと疎いですゝみたいな女の子がそう言っているとさあ、ギャップですげえ滾るんだよね」

「う……っ♡……は、あ……っ♡」

補食されちゃいそうな久我さんの雄の表情に背中がゾクゾクする。

する……と大きい掌がスカートをたくし上げて、すり♡すり……♡と、じつとり内腿を撫でていく。脚の付け根、ショーツのラインぎりぎりをなぞるように指が滑っていった。

断られて当然だと思ってたのに……本当にこのままシチャうのかな……とドキドキしていると、ふと、ここがどこだったか思い出して——慌てて脚を閉じて動きを制した。

「くくく久我さん……！こ、ここ、お店だから……だ、だめです……どこか別

の場所……ほ、ホテルとかで」

「んー？大丈夫、ここ、カラオケついてるから防音だし、俺が呼ばない限り店員も来ないから」

「っ、で、でも……ひ、ひゃあっ♡」

「……それに、もう下着シミができてんだけど。こんなに期待してんのに、我慢させちゃ千歌ちゃんのまんこが可哀想じゃん」

抵抗も虚しく、ぐいつと脚を持ち上げられて、久我さんの目の前でぱっかり開脚をさせられてしまった。

その綺麗な瞳が、どこを見てるのか分かって顔から火が出そうになる。

「~~~~~っ」

「んで、前の男に反応が悪いつて言われたんだっけ？……そんな風には見えな
いけどなあ……ちよつと膝でまんこ擦られたぐらいで、こうして濡れてんのに」

カリッ♡カリカリカリッ♡

「あ、あぁっ♡あ、はぁ……っ!?ん、んう……っ♡」

久我さんの指がショーツの中央に触れた。生地越しに突起を指先で小刻みに引っ搔かれて、腰をびくびく跳ねさせてしまう。

「感度もいいし……もしかしてアプリで初めて人と会ったって言ってたのも嘘？初心なフリも計算で、本当は他の男にもう開発されてんだろ」

「ち、違いますぐ……っ♡ほ、本当に、久我さんが初めてでえ……」

「ふーん……その割にはしっかりクリも勃起してんなぁ。分かる？引っ搔く度むくむくって大きくなってんの」

「は、あっ♡そ、そんなにや……知らな……っ♡あっ♡そ、そこ、触られるとむずむずして……っ、ふ、うっ♡」

「だからそこ、じゃないだろって」

くりゅっ♡

「んぐっ!!♡ご、ごめんなさ……っ、く、くり……っ、クリトリス……指先で

カリカリされると……ショーツと擦れてぴりぴりってして……つ、わ、私、今日
変……っ♡い、今までこんな事無かったのに……お腹の下があ、熱くて……う……っ♡」

「その言い方えっろいなあ……指、動かす度にシミがどんどん広がってる……あは、下着びちゃびちゃになっちゃったね」

「もう必要ないし脱いじやおつか」とするりとショーツを下ろされてしまった。つう……と透明な糸を引きながら、ぬらぬらと愛液にまみれたおまんこが頭になる。

「うわ、千歌ちゃんのまんこ愛液でぬるぬるになってる。これで感度悪いって言われてんの本当に謎なんだけど。元彼がよっぽど下手なだけだったんじゃない？」

「~~~~~っ！♡」

むわあ♡と熱気が立ちそうなくらい、ほかほかになっているおまんこをまじまじと凝視されて何も言えなくなる。視線に反応するようにひく……♡とナカ

を収縮させてしまった。

（こんなかつこいい人に、私のお……おまんこ見られてる……っ。~~~~っ
恥ずかしい、恥ずかしい……!! おまんこの入口、勝手にひくひく動いて止ま
らないよお……っ♡）

久我さんが話す度に息がかかって余計に意識してしまう。あまりの近さに、
恥ずかしすぎてまた反射的に脚を閉じようとする。

「何脚閉じようとしてんの？セックスの練習したいんだったら、恥ずかしが
らずにしっかりまんこ差し出せよ」

ぬりゅっ♡くりくりくりくりっ♡ぐりゅっ♡♡

「あっ♡は、ああああっ!?!♡ご、ごめんなさいっ!ひ、開く……っ♡脚開きます
からあっ♡ひゅっ♡ちよ、直接、クリこねこねしないでえっ♡」

愛液をまとった指がクリを押し潰すように円を描く。下着越しじゃない、直で触れられる快感はとんでもなくて。内腿をブルブル震わせながら、言われた通り精一杯脚を開いた。

「はーっ♡はーっ♡……あっ♡」

「そー、そー。もう閉じないように自分で膝抱えて。はー……この体勢、まんこ見せつけて誘ってるみたいで良いな……ちんこにクル……」

「……ん、ふうっ♡」

「脚ぶるぶる震えてんじゃん。必死に言われたこと守って健気で可愛い……ちゃんと脚開いてるおかげでピンピンになったクリも、まんこの入口が愛液垂れ流しながらヒクつかせてんのもよく見えるし……ここ、今なら簡単にちんこ挿入りそう」

「んっ……あ、あぁっ♡ゆ、ゆび……いっ♡ナカには、はいってりゅ……っ♡」

ぬぶ♡ぬぶぶぶぶぶ♡

ナカに久我さんの長い指がゆっくり挿入ってきた。前の彼氏にされた時には異物感で苦しかったのに、ぬかるんだそこは難なく飲み込んでいく。

「あー……ナカあつ」

「ひっ♡ひっ♡ん、あ♡は、ああ……っ♡」

「ん……体に力入ってる。ナカ触られんの怖い？」

「っ……ご、ごめんなさい」

「謝んなくていいって。大丈夫？一回抜く？」

苦しくはない。けど、今までとの元彼とのセックスを思い出して息を詰まらせてしまう。久我さんはそんな私の様子をすぐ見抜いて、面倒くさがるところか心配そうに氣遣ってくれた。

私の方からセックスして欲しいとお願いをしておいて、行為に慣れてないこの体が申し訳なくなる。

「抜かないで……っ、続けてください……っ、前の彼氏とシてた時は、ただただ苦しかったので……か、体が勝手に身構えちゃって……」

「ふーん……聞けば聞くほどそいつにムカついてくるな……こんなに敏感な子、そうそういないと思うけど……ん、ぢゅ……♡ぢゅ……♡」

「あっ、あああっ!?!♡」

びりびり♡と下半身に電流が走った。

クリをパクリと食べられたかと思えばそのままちゅうちゅう吸われて。勝手に腰がぐんっ♡と持ち上がって、頭の処理が追いつかない。

「しょ、しよれだめっ♡くり、クリ溶けちゃううぐっ♡あーっ♡た、食べないでええっ♡」

「んー、ぢゅう…♡はは、すっげえ声。クンニ、初めてだった?千歌ちゃんのクリしっかり勃起あがってるからこうやって…ん、ぢゅっ♡ぢゅっ♡♡」

「あっ♡あゝゝっ♡さ、されたことにやいです、からあっ♡これ、変、変なのくるっ♡お腹の下、ぐるぐるして…っ♡な、なんかくるっ♡込み上げてきちゃいそ…ぐ…っ♡♡」

にゆる♡にゆる♡

吸い付きながら久我さんの舌がクリを包み込んで、熱い口の中でもみくちや

にされる。

ナカに埋まっていた指も何かを探るように動き出して、未知の快楽に流されることしか出来ない。

「ん……いい感じに体の力抜けてきた。指もう苦しくない？」

「ひ、は、はいっ♡く、苦しくは……っ♡あっ♡♡ナカで指動いてるのにいっ♡ま、またクリ吸っちゃだめっ♡や、やだあぁっ♡♡」

「やだ、じゃないだろ。セックス上手になりたいんだったら、ナカでも快感拾えるようにならなきゃ駄目じゃん」

「ふっ♡う、うううっ♡♡」

二本目の指を挿入されるも、抵抗感はない。膣壁をなぞりながらナカをぐちゅっ♡ぐちゅ♡と音をたてて掻き混ぜられる。

「は……あっ♡も、十分、な、ナカ気持ちいいですからあっ♡指ずぼずぼって抜き差しされりゅの……ひっ♡き、気持ちいい♡」

「ははっ、気持ちいいならよかった。まあ、まだまだこんなもんじゃないけど。」

千歌ちゃんってさあ、女の子はもつと気持ちよくなれる場所があるの知らない？」
「へっ……？♡」

これ以上の……？想像が出来なくて間拔けな声が漏れてしまう。
久我さんはきょんとしてる私を見て、「Gスポット。触られたことないんだ」と、楽しそうに笑いながらより一層強く、ナカを擦りあげる。

「ひっ♡ひううづっ♡♡指、強くなって……は、あっ♡」

「んー……千歌ちゃんのは……あ、この辺りか？」
「っ!!」

不意に指先をぐ……♡と曲げられてある一点を掠めたその時。目の前がスパークした。今までとは比べ物にならない快感が走って——今日一番の嬌声が口から飛び出す。

ぐりゅっ♡ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅっ♡♡

「はは、見つけた♡」

「おっ!?♡あっ、ひ、い……………あ、あ~~~~っ!!♡♡」

ビクッ♡ビクビクビクビクンッ♡♡

頭が真っ白になって体が浮き上がる。

ザラザラしたそこを二本の指が小刻みに擦り上げられて、何かが弾ける感覚。全身が勝手に跳ね回って制御ができない。

「はーっ♡はーっ♡あ、ふう…………♡」

「すっごい全身ガクガクさせて激しくイったね。Gスポ、指でごしごし撫でられるの気に入った?」

「あ……、ん……う♡へ……わ、私いま、い、イったんですか……?」

まだ体が震えてて、遠くで耳鳴りがしてる。

ずっと気持ちいいが続いてて、快感が去っていかない。

甘い吐息を漏らしながらぼーっとしていると、久我さんの言葉に目を丸くする。

（さっきの……あの、目の前が真っ白になる感覚がイクってこと……？今まで一回もイけた事無かったのに……）

「ああ……今までイった事なかったんだっけ。千歌ちゃんの初イキ見れてラッキーだな」

「んあっ♡ま、まだイッてる、イってますからあっ♡♡指、動かさないでええっ♡♡」

「一回だけじゃ覚えられないじゃん。イったばかりのまんこって敏感になってるから、またここすりすりされたら連続イキしちゃうだろうなあ。体がしつかり覚えられるまでたくさんイこうか」

「ひっ♡あっ♡あ~~~~っ!!♡♡」

ナカに埋まったままの指が動き出す。またGスポットを狙い撃ちするかのよう
に指の腹で撫でられて、さっきの熱が簡単にぶり返してきてしまう。

ぬちゅっ♡ぐちゅぐちゅぐちゅっ♡

「あ~~~~っ!!♡こ、これまたくるっ♡♡さっきのやつ、きちやうぐっ♡♡」

「くる、じゃなくてイクね。ほら、Gスポ目掛けて手マンされて連続イキしろ♡」

「あ、う、うづ~~~~っ!!♡い、イクッ♡また、おなか熱いの、溜まってきたあ♡♡あーっ♡お、おまんこ、指でとんとんされて、イきますっ♡♡いくっ……………いっ、~~~~~!!♡♡」

「は、二回目の手マンイキも上手にできたね♡あー…………ナカうねってる。これちんこ挿れたら絶対気持ちいいだろうなあ…………」

今日覚えたばかりのGスポットをまた擦られて簡単に昇りつめてしまった。膣壁が指をぎゅうぎゅう締め付けるも、それを振り払うようにまた動きが再開して頭を振り乱して悶える。

「や、やあああ♡♡と、止まって、ゆび、とまってえ♡」

「あは、止まるわけじゃないじゃん。気持ちいいことだけしかしてないから大丈夫。頭ん中キャパオーバーしてる?」

「な、なんでえ?♡だ、だって、二回も連続でいったのにいっ♡お、覚えたっ♡おまんこイキちゃんと覚えましたが♡♡」

「っふ、必死になってんの可愛いね。まあ、半分は俺が千歌ちゃんのイキ顔何度でも見たいだけなんだけど。顔真っ赤で体ブルブルさせながら舌突き出してガチイキしてんの、すげええろいんだよね」

終わらない快感が受け止めきれなくて怖い。必死に久我さんに訴えてみても、手の動きは止まるどころかどんどん速くなっていく。

「あっ♡ん、ひ、ひぐっ♡♡て、手マン、つよ、つよいっ♡♡」

「あ、またナカきゅっ♡きゅっ♡って痙攣してきた。すぐイキそうになる千歌ちゃんのまんこが雑魚なだけだよ」

「あ~~~~っ♡だ、だって、しょこ触られると、勝手に気持ちいいのがくる、うっ♡ごめんなしゃ♡よわよわおまんこでごめんなさいっ♡」

まさか自分がこんなに乱れることができるなんて。的確に弱いところを探し当てられて、連続イキして。感度が悪いと言われて思い詰めてたのが嘘みたい。

「謝んなくていいって。よわよわまんこ何回でもイきなよ♡……………ん、ぢゅ♡♡

ぢゅづ……っ♡」

「あっ、は、あ~~~~っ！♡く、クリ一緒に吸っちゃ……だ、だめ~~~~っ!!♡♡」

また久我さんがおまんこに顔をうずめた。手マンをされながらクリトリスを吸い出されて——もう何も考えられなくなる。

ぢゅっ♡ぢゅっ♡ぢゅ、ぢゅ~~~~♡

ぬちっ♡ぬちぬちぬちっ♡♡

「あっ♡は、ああああっ♡♡イクッ♡おまんこイクッ♡」

「ん……いいよ。雑魚まんこまたイツちやえ♡……ん、ぢゅ~~~~っ♡」

「いっっ………♡♡あ、あ、ああ~~~~~~~~っ!!♡♡」

ガクンッ♡ガクッ♡ガクガクガクガクッ♡♡

一瞬、息が止まる。

腰が浮いて濁流のような快感をただただ受け止めた。

「ふ、あ……♡あぁ……っ♡」

「はー……やば、もう限界……」

呼吸が整わなくて、目の焦点があわない。

がに股になってるのも気にせず、びくびくと脚を震わせながらテーブルに仰向けで転がっていると、服が擦れる音と何処か余裕が無さそうな久我さんの声があった。

べちんっ♡

「へ………?」

「はは、すっげえバリ勃ち♡」

おまんこの上に叩きつけられた、びんびんに反り返った硬いそれ。経験の乏しい私ですら、一般の男性のものより大きい事が分かる。

これが……わ、私のナカに……?これから起こることを想像してしまっと思わず息を飲んだ。

「く、久我さ……………」

「ごめん、先に謝っておく」

ぬちゅ…………っ♡

「ひ…………♡」

「加減できないから…………っ」

ずぶっ…………♡ずぶぶぶぶぶ…………♡♡

「おっ…………♡あ…………♡あ、あ…………~~~~♡♡♡」